

和華蘭(わからん)研究塾 ～長崎よかもん再発見～





■ 塾長コメント ■

長崎を離れ気が付くと、人生の半分以上を東京で過ごし、だんだんと長崎との心の距離ができてきた頃、無性に寂しさが込み上げてきました。帰省する度に風景は変わり、町の名前を聞いても思い浮かばず、どんどん知らないことが増えていきました。

そんなとき関東の友人に長崎旅行に連れて行ってと頼まれ、「三泊四日の短い期間でも長崎の良さを伝え、もう一度行きたいと言ってもらえるような旅行プランを作ろう！」と思いました。それが「大人の修学旅行・長崎」プロジェクトの始まりです。少人数からスタートしたツアーは、ファンを集めた「さだまさし聖地巡礼の旅」など。同行できないときは携帯電話での遠隔旅行ガイド。団体では日本人の姿を語りつぐ会（歴史塾）にプレゼンテーションをし「長崎くんちと歴史巡り」に皆さんをお連れしました。そんな活動の中、長崎伝習所在京塾を知り、東京で長崎一ツ！と叫ぶ塾や長崎検定塾に入塾。両塾長の熱い想いに動かされ、塾生の皆さんの後押しもあり、和華蘭研究塾が発足しました。きっと私と同じように、大好きな長崎に自分の大切な人を連れて行き喜ぶ顔が見たい、そのためにもっと長崎のことを知りたいと思っています。いる方はたくさんいらっしゃると思います。

そんな方々が「長崎案内人」になるためのお手伝いができればと思いました。

■ 塾の目的 ■

「和華蘭研究塾」は和華蘭文化を通して、長崎の良さを在京長崎人だけでなく長崎を好きな方、長崎に興味を持っていらっしゃる方も一緒に勉強をし、塾生ひとりひとりがその良さを語れる人になり、より多くの方を長崎へお連れできる案内人になってもらうことを目的としています。

■ 塾の研究・活動内容 ■

和華蘭研究塾の目的を達成するための具体的な活動は三つです。

一つ目は、塾の名前でもある「和」「華」「蘭」をテーマに、様々な分野の講師を長崎からお呼びして、次の内容で講義をしていただき、塾生の長崎への興味を深め、知識を高める。

「和」和華蘭で分類した長崎くんちの歴史と出し物（講師・山下寛一氏）

二つの長崎ぶらぶら節（講師・大田由紀氏）

「華」長崎の中の中国&ランタンフェスティバルの歴史（講師・張仁春氏）

「蘭」長崎の町の始まりから現在の長崎事情（講師・山口広助氏）

二つ目は、第一回目の講習会の題材でもある、長崎くんちのテレビ中継等では観られない「長崎くんちを支える人々」を取材。

長崎の人々が一丸となっている姿を映像で観ていただき、一つの文化を守り支えることの素晴らしさを感じてもらう。

三つ目は、グループワーク

「和」「華」「蘭」の三つのグループに分かれて、二泊三日の旅行ツアーのプランを練り、旅の葉を製作。その中で生まれる塾生同志の交流。プラン作りをしながら長崎の情報交換。

祭りを作り上げることで自らも長崎と向き合える。

■ 塾活動の成果 ■

一つ目の活動である「和」「華」「蘭」テーマ別講習会では、塾生の方達から、「長崎出身なのに長崎のことを知らない自分が居た」「もっと長崎のことを知りたい」「知れば知るほど誇らしい」「早く誰かを連れて長崎観光案内したい」等々。あらためて長崎の素晴らしさを感じ、塾生ひとりひとりの長崎愛を高めることができましたと思います。

また長崎出身でない方達からも、「長崎に早く行きたい」「長崎の本を読みあさっている」「知れば知るほど奥深く、はまっていく自分が居る」等々。

たくさんの関東人に長崎への目を向けていただくきっかけを作れたと思います。

二つ目の活動の長崎くんち取材レポート鑑賞会では、テレビ中継では観ることができない映像を観ていただき、長崎くんちを支える人々の姿を通して、この祭りの重要性を感じていただきました。塾生の感想としては、「もっと多くの方々に長崎くんちを知って欲しいと思うようになりました。」「今までと見る目が違ってきた。」「祭りを通して歴史も学ぶことができ、実際の映像を見ることで、文化の継承に尽くす方達に敬意の念が湧き、自然と涙があふれてきました。」というように、多くの方から感動の言葉をいただきました。また取材には、町の方達に快くご協力いただき本当に感謝いたしております。

三つ目のグループワークでは、塾生ひとりひとりが協力し合い意見を出して、1時間という短時間にもかかわらず「和」「華」「蘭」の特徴ある旅行プランをまとめることができました。

まとめた物を成果物として、折りたたむとポケットに入るサイズの『長崎和華蘭旅ガイド』を作り上げました。

この成果物を使い、沢山の方々に少なくとも三回は長崎へ足を運んでいただけるよう、塾生ひとりひとりが「長崎案内人」として活動していけたらと思います。



和華蘭研究塾 活動記録

日 時	場 所	内 容
平成 29 年		
6 月 7 日 (水)	塾長宅	和華蘭研究塾スタッフミーティング
6 月 24 日 (土)	市政会館	第一回和華蘭研究塾講習会 講師・山下寛一氏 国指定無形民俗文化財・諏訪町龍踊総監督 伝統芸能振興会・踊町委員会副委員長 『長崎くんちの歴史・くんちの中の和華蘭』
7 月 23 日 (日)	塾長宅	和華蘭研究塾スタッフミーティング
9 月 9 日 (土)	グランドヒル市ヶ谷	第二回和華蘭研究塾講習会 講師・大田由紀氏 長崎史談会理事・長崎女性史研究会会員 『二つの長崎ぶらぶら節・愛八と凸助』
10 月 29 日 (日)	スタジオ ハコス	第三回和華蘭研究塾講習会 第一部長崎くんち取材報告 第二部グループワーク (和華蘭旅行プラン作り)
11 月 26 日 (日)	スタジオ ハコス	第四回和華蘭研究塾講習会 講師・張仁春氏 崇福寺総代・ 長崎ランタンフェスティバル企画幹事長 孔子廟 唐人館社長・新地「錦昌号」社長 『ランタンフェスティバルの歴史と 長崎の中の中国』
12 月 17 日 (日)	スタジオ ハコス	第五回和華蘭研究塾講習会 講師・山口広助氏 長崎歴史研究家・料亭「青柳」社長 『オランダさんより南蛮人』
平成 30 年		
3 月 12 日 (月)	三軒茶屋ふれあい広場	長崎ランタンフェスティバル PR 展 参加
3 月 18 日 (日)	塾長宅	和華蘭研究塾スタッフ・成果物製作
3 月 21 日 (水・祝)	ベルナード観光通り	長崎伝習所まつり 講習内容のパネル展示 塾生製作 和華蘭ツアーの葉 展示

第一回講習会

日時：平成 29 年 6 月 24 日(土)

講師：山下寛一氏

国指定無形民俗文化財 諏訪町龍踊総監督

伝統芸能振興会 踊町委員会副委員長

NHK 長崎くんち 生放送解説

テーマ：長崎くんちの歴史とくんちの中の和華蘭

＊ビデオ鑑賞（グラバー園内くんち資料館で流されている動画）

＊長崎くんちでは、踊町・年番町の役割があり、一つの踊町は、7年に一度奉納するので、7年間観る必要がある。

＊奉納踊りは和物、唐物、オランダ物、ポルトガル物とあるが、一番多いのは唐物で、龍踊りが4カ町、唐人船、竜宮船、龍船などがある。

＊阿蘭陀万歳は和の町娘、華の唐子、蘭のオランダ人と一番和華蘭文化を感じる奉納踊りである。

＊傘鉾は町の歴史であり特徴を表している。

＊庭見せ・人数揃い・奉納のしきたり、庭先回りや御花について解説していただきました。花紙の書き方や一枚の白い紙を使い、折り方で熨斗やはちまきの興味深いお話をしていただきました。くんちや方言のクイズなどもあり講習会場は笑いにあふれていました。



第二回講習会

日時：平成 29 年 9 月 9 日(土)

講師：大田由紀氏

長崎史談会理事 長崎女性史研究会会員

テーマ：二つの長崎ぶらぶら節・愛八と凸助^{でこすけ}

＊ぶらぶら節のルーツは「やだちゅう節」

＊凸助 昭和 5 年ニッポノホンレコード(現日本コロムビア)から発売(B面長崎港節)

＊愛八 昭和 6 年ビクターレコード(B面浜節)から発売される。

＊「町検番」と「東検番」、レコード会社のライバル関係から競作となったが、現在歌われている節回しは凸助^{でこすけ}のものに近いものでした
＊両音源の聴き比べを行いました

＊当時の愛八と凸助^{でこすけ}の写真

(モノクロで凸助^{でこすけ}の写真は貴重)

＊「肥前さんの番替わり」や「オロシヤが…」の歌詞は時代を反映している。

「子供のハタ喧嘩」は今は見られない「陸^{おか}ペーロン」

凸助^{でこすけ}は昭和 9 年の「長崎産業観光博覧会」で「阿蘭陀万歳」の才蔵を演じ、その後は花柳流の舞踊師匠・花柳寿太満となり後進の指導にあたる。



第三回講習会

日時：平成 29 年 10 月 29 日(日)

第一部 【長崎くんち取材报告会】

10月7日(土)～9日(月・祝)に開催された「長崎くんち」の踊町への密着取材を報告。

普段は観られない踊町の裏側を撮り、プロジェクトで上映をしました。

踊町の方達の苦楽をズームアップで表現しました。



第二部

【グループワーク/和華蘭旅行プラン作り】

塾生を「和」「華」「蘭」の3チームに分け、オリジナルの2泊3日旅行プランを作りました。



短い時間の中、各々が独自のスケジュールを作り、観光名所の写真に説明を付け加えて完成させました。





ブラッシュアップしてでき上がったものを
伝習所まつりで長崎伝習所総長に贈呈。



第四回講習会

日時：平成 29 年 11 月 26 日(日)

講師：張 仁春氏

崇福寺総代

長崎ランタンフェスティバル企画幹事長

孔子廟 唐人館 社長

新地 錦昌号 社長

テーマ：ランタンフェスティバルの歴史
長崎の中の中国

＊長崎最新情報

出島

ランタンフェスティバル準備状況

＊長崎華僑の歴史

＊崇福寺における長崎華僑の年間行事

＊媽祖様、月下老人などの信仰

＊媽祖様の誕生日のお供えなどについて

＊中国盆のについて

＊ランタンフェスティバルの歴史

＊ランタンの製作などについて



第五回講習会

日時：平成 29 年 12 月 17 日(日)

講師：山口広助氏

長崎歴史研究家

料亭「青柳」経営者

テーマ：オランダさんより南蛮人

＊長崎最新情報

＊南蛮人というとポルトガルが浮かぶが、その痕跡はほとんど残っていない。

＊言葉ではオランダ語よりポルトガル語が多く残っている。(カルタ・チョッキ・トタン・パン・ボタン・カップ・カステラなど)

- *長崎の始まり(1571年開港)について
現在の地図を重ね合わせて解説。
- *攻められていた長崎をイエズス会に譲って
守ってもらった。(要塞化した)
- *旧県庁から桜町小学校までに防衛用の「空堀」が3つもあった。
- *長崎の町の名前について。



活動を終えて

長崎伝習所の在京塾をやらせてもらうことになった、名前は『和華蘭研究塾』だと長崎の友人に話すと、凄い名前をつけたものだと驚かれました。

しかし東京では長崎＝和華蘭文化とは知らない方が多く、和華蘭の和は日本と、一つ一つ話しを始めると長崎を説明するのにとても解りやすい言葉だと誰からも言われます。

長崎へひとりでも多く観光にお連れしたい。きっかけは作れても問題はその先であって、もっと上手にたくさん色々なことを解説したい、もっと勉強がしたい。

そんな気持ちで塾をやらせていただき、多くの塾生の方々とお話をすると同じ気持ちの方がたくさんおられました。

また、長崎出身ではない方の参加も多く、長崎への関心の高さを実感しました。

各講師のお話にも目を輝かせ聴いておられる姿、質疑応答での質問も多く、毎回50名前後集まりました。

塾生同士の輪も生まれ、長崎愛も確実に高まりました。



成果物の元になるグループワークでの和華蘭旅行プラン作りでは、たくさんの意見が飛び交い、一時間という短い時間で「和」「華」「蘭」の三つのプランが出来上がりました。

今後はその成果物の『旅の葉』を使い、塾生の皆さんが身近な方々を長崎へお連れする『在京長崎案内人』として、旅のお手伝いをしていただけたらと思います。

また、今回の塾の活動は、長崎愛にあふれた塾生の皆さんの力のおかげでできたものです。本当にありがとうございました。





OB 塾「在京長崎・感・考・塾」

田尾塾長から
長崎OOLOVERS
のお知らせ

OB 塾「東京で長崎一ッ！
っと叫ぶ塾」
黒沢塾長から
軍艦島ツアーのお知らせ



「祭りを核としたまちづくり講座」
内閣府・地方創生カレッジの亀和田さんより
上記講座に長崎くんちが入っていることや、
入塾の方法などお知らせいただきました。

塾生のコメント

小金井 宏之

私でいいのだろうか。出身でなく在住経験もない。長崎には何の所縁もない。今回塾生として感想を書くように求められ、この想いがまず心に浮かんだ。長崎検定の存在は知っていた。東京でも受験できると知り初めて挑戦したのは3年前。東京地区にも長崎に想いを持っている方がいらっしゃることを再認識した。しかし自分がその方々の中に入るのは難しいと思っていた。しかし受験したことで、昨年長崎検定塾の存在を知り、今年度の和華

蘭塾につながった。以前より感じていたのだが、私が知る東京圏の長崎出身の方は、皆さんが長崎愛を持っていらっしゃる。集まりに参加してみてそれは間違いではないと改めて感じた。講師の話に耳を傾ける皆さんの姿や懇親会で飛び交う長崎言葉、いずれも私にとって居心地のいい時間です。毎回参加受付時に次回は参加されますか？と尋ねられても、その場でお答えできないことばかりだった。それでも実は皆勤だったことに、この感想文の依頼で初めて気付いた。とはいえ懇親会は皆勤ではない。次の目標は講座より、懇親会皆勤でしょうか(いえ、まじめに勉強もします)。初めて訪れたのは、1982年10月。眼鏡橋は見られませんでした。次は1988年9月末。お諏訪さんでは棧敷席を解体していました。私が長崎へお邪魔したのは、なぜか皆さんにとってはいい思い出ではない時期です。そして今まで長崎には10度の訪問をしつつも、まだハタ揚げもペーロンも精霊流しもくんちもランタンも一度も見ていません。こんな私ですが、もしまた集まりに参加することがありましたら、どうぞお声をおかけください。よろしくお願い致します。

最後になりましたが、塾長をはじめ運営をしてくださった皆様、本当にありがとうございます。

柴田 みどり

塾長高山さんの「熱い長崎愛」が伝わる1年でした。長崎2大祭りをベースに歴史・伝統・日々の生活から見える南蛮文化など、各講師の方々から興味のあるお話をたくさん伺いました。

第1回講習会での山下寛一さんの講義では、長崎くんちの現場を運営されている目線から、歴史の中のくんちの流れや伝統芸能を維持し

ていく事の大変さや各踊り町の現在の実態など深いお話でした。「くんちの DVD 鑑賞」から学べる 7 年かけた各踊り町の演技は圧巻でした。そして、山下さんの迫力あるお話のリズムに押されながら吸い込まれました。ありがとうございました。第 2 回の大田由紀さんの講習会は、2 つの長崎ぶらぶら節の貴重な原盤を聴き比べ、当時の検番パワーを感じた時間でした。第 3 回講習会は、長崎くんち取材報告の DVD 鑑賞とグループワークでした。長崎市民総出のお祭りでは、笛と太鼓のしゃぎりと踊り町のかげ声が青い秋空に響いてました。塾生の方々とスタッフの皆様お疲れ様でした。後半はグループワークで、旅行プランの作り。「和」「華」「蘭」の 3 班に分け、自分達の薦める場所、食べ物、観光をテーマにしました。再発見の長崎を見つけるチャンスかもしれません。第 4 回は、張仁春さんによるランタンフェスティバルと長崎の中の中国についての講習会でした。ランタンフェスティバル立ち上げから現在に至るまでの、実行委員としてのご苦労話を伺いました。オブジェができて上がるまでの作家、作り手、場所、時間、経費などの調整が大変な事を知りました。冬の長崎を賑やかに彩るオブジェの迫力や、1 万 5 千個のランタンの光の渦が点灯した時は、ホッとして美酒に酔いしれそうですね。また張仁春さんは崇福寺の普度蘭盆勝会の相談役も兼任されており、華僑の皆様の協力で長く受けつがれてきた行事が中国文化を色濃く残されているとのこと。祭壇のお供え物、豚の丸焼き、長い線香、赤いランタン、金銀資などで霊を送り、1 年で一番賑わう行事だそうです。わかりやすくスライドにしてくださいありがとうございました。第 5 回講習会は、山口広助さんの南蛮文化と長崎につ

いてでした。長崎は長い岬に港が作られ、ポルトガル文化から長崎の繁栄が始まり、「長崎は日本のローマなり」と言われるほど教会堂がたくさん並んでいたようです。長崎の町に出島や新地蔵所、幕末に出来た外国人居留地など海を埋め立てて作られ、そこから数多くのヒストリーが生まれていくこととなります。石橋、教会、寺院、印刷、写真など、「和」「華」「蘭」の文化を長崎人は色々な物を受け入れ色々な宗教にこだわらないでいるちゃんぽん文化が根づいているとのことです。山口広助さんは、和華蘭の歴史探訪を足掛かりに、過去の足跡を語り継ぐ未来の子供たちへの伝道師のようでした。長崎の和華蘭の歴史を聞けば聞くほど、覗けば覗くほど魅力のあるまちです。今後もこのような情報が、私たちの手元に届くことを楽しみにしております。

尾垣 聡子

長崎を離れて、かれこれ何十年。とはいっても、年に 1~2 回は帰省していますので、ずうーっとヨカヨカ長崎人なのです。「和華蘭」とは、まさしく長崎で生まれ、長崎で育まれた言葉、子供の頃から、たっぶり、どっぶり「和」「華」「蘭」の長崎に包まれてきました。子供の頃から、わからんことは、わかりたいと思いました。この塾でまたたくさんのふれあいと、知識に出会えました。もっともっと、長崎よかとこばいに、触れてみたいです。長崎に生まれて幸せです。がんばらんばね。

坂本 貞好

東京伝習所は平成 21 年に「在京長崎応援団塾」として始まった。メンバーは 30 名。長崎好き、熱い思いの方が多い！というのが第一印象。たまたま、なんとなく参加した自分にとって衝撃的だった。「和華蘭研究塾」の参加者は益々長崎愛に磨きのかかった方が多

い。講習会后、居酒屋での懇親会は「長崎」を肴に話が弾む。塾長をサポートされているスタッフの皆さんの連携も素晴らしく、講習会への参加を楽しませてもらっている。

田尾 正行

伝習所塾が東京で始まった平成 21 年度「在京長崎応援団塾」に参加させていただき、それからずっと参加しています。24・25 年度は「在京長崎・感・考・塾」も経験させていただきました。最初の頃は、東京に居る長崎出身者が故郷長崎をみて考え、提案するという塾が多かったと思いますが、最近は外に出てしまった長崎人が長崎を勉強する形になってきました。和華蘭塾も今年度 4 回のセミナーが行われ、またスピノフの勉強会も行われたとのこと。東京に居る長崎出身者は高校を卒業してから長崎を出てきた人が多く、深く長崎を知らないまま上京、ふるさとの文化を勉強する良い機会であったと思います。長崎を PR するために長崎を知りましょうということだと思えます。皆さんの知識が豊富になり、新しい発見で益々好きになり、長崎を熱く盛り上げていければいいなと思っています。

小岩 寿樹

「和華蘭」とは誰が考えたのでしょうか？これほど長崎にフィットした言葉は無いと思われず。その「和華蘭」を冠にした塾の 1 年は、実に楽しく充実したものとなりました。塾長の「くんち」への思いから派生した長崎の有識者のお話は、長崎での様々な過去の出来事が私の中で走馬燈のように浮かんで消え、通り過ぎ去って行ったような錯覚を覚えさせました。「長崎ぶらぶら節」を最初に録音・リリースした町検番の芸者凸助さんのこと、そこから長崎産業観光博覧会で披露され

た「阿蘭陀万歳」のこと、そして長崎くんちの奉納踊りとなっていく経緯など、本当に「ヘー！ヘー！ヘー！」のトリビアの泉でした。

中国やオランダから渡って来た文物が長崎情緒というものに発展して来たということを自分の中で実感することができました。また長崎出身でない方々も多く、長崎に赴任していたとか、連れ合いが長崎の人だなど、そういう人達よりは少しだけ長崎のことを知っているということで、とても嬉しく、おかげで長崎の町は他の地域の方々にとって憧れの町であるということが実感できました。旅行をしてみたいと思っている人達に長崎で和華蘭文化へタイムスリップしてもらい、あの街のサポーターになってもらえるよう、今後の塾活動で長崎を啓発する電波を発信して行きたいと思っています。

黒沢 永紀

「和華蘭」を知ったのは、もう 10 年くらい前のことだろうか。赤寺もなければ居留地もない東京で生まれ育った自分にとって、それはパスポートなしでいける外国、すなわち長崎を象徴する言葉だった。和華蘭は、日本と中国、そしてヨーロッパの融合から生まれた長崎の混沌とした文化を表す言葉で、「よくわからない」という意味の「わからん」と、駄洒落の掛け言葉になっている。「わからん」ことは一長一短。良く言えば、謎が多く奥行きがある魅力的な言葉だか、悪く言えば、掴み所がなくすぐに理解してもらえない、という意味にもなる。確かに長崎の文化は「わからん」ものが多い。例えば長崎くんちなどは、その最たるもの。私にとって祭りといえば神輿くらいなもので、とにかくただ担げばいいだけの、極めてシンプルなものだ。それに比べてくんちはというと、まず傘鉾からしてわ

からない。「もってこ〜い」や「よいやあ〜」も、タイミングが肝心。踊りも、担ぎも、引きも、意味不明な出し物のオンパレード。長崎くんちの文化を理解しないと楽しめない。祭に限らず、食文化もまた然り。尾ひれから始まる卓袱や、唐灰汁麺でないと名乗ってはいけないちゃんぽんなど、しきたりにうるさく、かつ長崎ならではのものが数多い。長崎の文化とは、排他的な文化だと思う。国内で唯一、隣接県が一県しかないという陸の孤島が原因だろうか。グローバルが叫ばれる昨今、国内でも全ての人や文化が、東京をはじめとした大都市圏へ”右へならえ”となりつつある。そんな中、今でも独自性をしっかりと守っている長崎の文化は、希少価値が高い。東京で生まれ育った自分は、これからも長崎を「和華蘭」異国と感じながら、発信していきたいと思っている。

和華蘭研究塾

塾長	高山 美枝子				
1	秋山 俊浩	21	柏原 久美子	41	高井 さな枝
2	安藤 和生	22	狩野 祐光	42	高嶋 則子
3	生井 久子	23	川崎 秀之	43	高橋 佳嗣
4	石井 順	24	河崎 律子	44	高山 明子
5	石井 伸治	25	川田 展弘	45	田川 未来
6	石黒 恵理加	26	木村 佳那	46	立部 浩司
7	石橋 純治	27	黒沢 永紀	47	田中 麻紀
8	市原 実	28	小岩 寿樹	48	田中 洋子
9	井上 節子	29	高麗 信子	49	辻川 智子
10	井上 早苗	30	古賀 民生	50	堤 利裕
11	岩永 智	31	小金井 宏之	51	寺川 京子
12	内田 祥子	32	児島 典子	52	冨永 理奈
13	卜部 愛	33	小園 裕造	53	中澤 圭代
14	大山 久美子	34	小林 康孝	54	中条 美帆
15	尾垣 聡子	35	坂本 貞好	55	中野 誠一
16	岡村 衣作子	36	柴田 みどり	56	夏目 恵美子
17	岡谷 未於	37	下高呂 佳子	57	南部 順子
18	小川 友子	38	末吉 正宏	58	西尾 直美
19	荻野 欣士郎	39	関 暁子	59	濱田 知之
20	笠原 慎也	40	田尾 正行	60	浜辺 沙希

和華蘭研究塾

塾長	高山 美枝子				
61	林 誠二	81	與賀田 直哉		
62	平館 涼子	82	横山 昌彦		
63	平野 智子				
64	広瀬 正己				
65	深堀 悦子				
66	藤田 茂				
67	藤馬 寛剛				
68	古江 陽子				
69	古谷 奈緒子				
70	前田 利夫				
71	増田 彌尋				
72	松尾 一昭				
73	松尾 陽子				
74	松田 嘉弘				
75	馬渡 賢一				
76	宮田 訪子				
77	村上 美保				
78	村越 絵里子				
79	保田 淑美			事務局員	東京事務所 北坂 信太郎
80	山根 陽子			事務局員	東京事務所 稲田 勝次郎